

エリザベス・ボウエンの戦時中の二つの短編  
—「幽鬼の恋人」と「幸せな秋の野原」—

剣持 淑

はじめに

ダブリン生まれのアングロ・アイリッシュ作家エリザベス・ボウエン (Elizabeth Bowen, 1899-1973) は二つの世界大戦を経験した。ボウエンは戦争の時代をどのように見ていたのであろうか。短編集『幽鬼の恋人』(*The Demon Lover and Other Stories*, 1945) の「あとがき」によれば、本短編集に収録された作品は、戦時中の 1941 年春から 1944 年晩秋の間に書かれている (“Postscript by the Author,” *The Demon Lover and Other Stories*, 216)。本稿では、イギリス空襲についての言及がある「幽鬼の恋人」と「幸せな秋の野原」について、時間と場所にとり憑いた「亡霊」(靈魂) と主人公との関係を検討する。前者では、超自然的な力にとらわれたまま、正体不明のタクシードライバーによってあちら(死)の世界に連れ去られる女性が描かれ、後者では、夢の呪縛から解放されてこちら(生)の世界に戻ってくる女性が描かれる。

1-1. 戦争の時代

両大戦間期から戦中、戦後に発表された 79 編の短編を集めた『エリザベス・ボウエン短編集』(1980) の「注」によれば、「幽鬼の恋人」(“The Demon Lover”) は戦時中の 1941 年 11 月にリスナー誌 (*The Listener*) に発表された (“Bibliographical Note,” *The Collected Stories of Elizabeth Bowen*, 784)。第二次世界大戦において、ドイツ空軍によるイギリス空襲「イギリスの戦い」(the Battle of Britain) は 1940 年 7 月 10 日に始まり、特にロンドン大空襲 (the Blitz) と呼ばれる爆撃は 1940 年 9 月に始まった。<sup>(1)</sup> 「イギリスの戦い」は 1941 年 6 月頃まで続き、ロンドンを中心に多くの都市が破壊された。

空襲は、イギリス空軍の飛行場にたいする爆撃を中心とするものから、都市爆撃を重点とするものへと変化していき、なかでもロンドンに度重なる空襲によって大きな被害を被った。…空襲での被害は大きく、都市空襲が最もはげしかった 1940 年 9 月から 10 月にかけては、1 万 2000 人近くの市民 (その 5 分の 4 以上がロンドン市民) が犠牲となった。

イギリスの多くの人びとは、第二次世界大戦の開始を、くるべきものがついにやってきた、という感慨をもってむかえた。…したがって、いったん宣戦が布告されると、

人びとの反応はすばやかだった。まず大規模におこなわれたのは、ドイツ軍の攻撃が予測される都市からの大量の疎開である。ある統計によると戦争勃発直後の時期に、83 万人の学童、52 万人の母親と就学前の児童、・・・が、地方に疎開を行った。・・・

18 歳から 41 歳（1941 年以降は上限が 50 歳）の男性は兵役登録の対象となり、軍隊にとられていった・・・。戦争勃発当初は婦人補助部隊に志願したり、防空防備体制に協力したりしていた婦人たちにたいしても、1941 年 12 月に徴兵制がしかれ、20 歳から 30 歳までの独身女性が、婦人補助部隊や重要な工場などに送りこまれた。

(木畑洋一、322, 326-327)

ボウエンはロンドン大空襲の時期もロンドンにとどまり空襲監視員として働いていたほか、戦時中、情報省調査官としてアイルランドで情報収集活動をするこもあった(Noreen Doody, 11)。また、当時住んでいたリージェンツパークのあたりは 1941-42 年及び 1944 年に空襲で大きな被害を受け、特に 1944 年にはクラレンス・テラス 2 番地にあった自宅の被害は甚大であった (Victoria Glendinning, 159)。

一方、「幽鬼の恋人」の冒頭の主人公ドロヴァー夫人 (Mrs. Drover) は、家族と田舎に疎開しており、夫人が疎開先の田舎からロンドンに出てきた日、ケンジントンの家に立ち寄るとい設定である。

It was late August; it had been a steamy, showery day: at the moment the trees down the pavement glittered in an escape of humid yellow afternoon sun. Against the next batch of clouds, already piling up ink-dark, broken chimneys and parapets stood out. (“The Demon Lover,” *The Demon Lover and Other Stories*, 91 ; “The Demon Lover”の本短編集からの引用は、以降、DL と略して頁数を数字で示す)

蒸し暑く、にわか雨が降った後、今は太陽が出ている。しかし、また黒雲が湧き上がり、次の雲の塊を背景に、空襲で破壊された煙突や手すり壁 (broken chimneys and parapets) が目につく。全知の語り手が描写するロンドンの風景はドロヴァー夫人が見ている風景でもあるので、彼女の不安や傷ついた心を写す心象風景と考えることができる。

## 1-2. 「幽鬼の恋人」と歪められた時代

ドロヴァー夫人がロンドンで目にした“parapets”は、ヴィクトリア時代等の建物の屋根の縁に作られた低い壁と思われるが、“parapets”には「城の胸壁」の意味もある。胸壁、戦争の時代、やがて登場する「亡霊」の連想から、シェークスピアの『ハムレット』を思い出す。第1幕1場、先王ハムレットの亡霊が「エルシノア城の狭間胸壁をめぐらした塔上の見張り台」<sup>(4)</sup> (“Elsinore. The guard-platform of the Castle.”) (*The Alexander Shakespeare*,

*Hamlet*, 27) に、深夜、鐘が1時を打った時に現れる。「幽鬼の恋人」では、「約束の時刻」(DL, 93) に戦死したと思っていた元婚約者が戻ってくるという設定である。『ハムレット』ではデンマークとノルウェーの間で戦争があったことと、まだ不穏な状況にあることが語られる。衛兵のマーセラス (Marcellus) は第1幕4場で「この国の何かが腐っている。」“Something is rotten in the state of Denmark.”(*The Oxford Shakespeare, Hamlet*, 184) と言い、王子ハムレットは第1幕5場の最後で「この世の関節が外れてしまった。」“The time is out of joint.”(*The Oxford Shakespeare, Hamlet*, 196) と言う。ボウエンは短編集『幽鬼の恋人』の「あとがき」の中で、短編集の最初の作品の説明に “dislocated”(“Postscript by the Author,” *The Demon Lover and Other Stories*, 218) という言葉を使っている。第二次大戦という戦争の時代もまた、この世の関節が外れ、何かが狂っていると感じられた時代であったと思われる。

第二次大戦中の8月末、ドローヴァー夫人は疎開先の田舎からロンドンに出てきたその日の最後に、閉めてあるケンジントンの自宅に立ち寄って、持ち出す物をいくつか探すことにした。語り手が「まるで…のように、見慣れない…」と、夫人が歩くロンドンの通りがかつてとは異なる様子であると語る時、彼女の意識が反映されていると考えることができる。“Dead air” に迎えられて家の中に入って行く彼女の姿は不吉な死を予感させる。

In her once familiar street, as in any unused channel, an unfamiliar queerness had silted up; a cat wove itself in and out of railings, but no human eye watched Mrs. Drover's return. Shifting some parcels under her arm, she slowly forced round her latchkey in an unwilling lock, then gave the door, which had warped, a push with her knee. Dead air came out to meet her as she went in. (DL, 91)

帰宅するドローヴァー夫人を目撃した人はおらず、「たわんだドア」“the door, which had warped” を膝で押し開け、死んだような空気に迎えられて、夫人は家の中に入っていった。

「ワープ」(warp) という単語から、近年 SF で取り上げられる「空間歪曲型ワープ」等による別空間への移動のイメージが浮かぶかもしれないが、アインシュタイン (Albert Einstein, 1879-1955) による特殊相対性理論 (1905) や一般相対性理論 (1915-16) がすでに発表されていた時代とはいえ、ここでは戦争で時代が「歪められている」と考えられる。ルイス・キャロル (1832-98) のファンタジー作品『不思議の国のアリス』(*Lewis Carroll, Alice's Adventures in Wonderland*, 1865) において、アリスが喋っている白うさぎのあとを追って穴に落ちていったように、慣れ親しんだ通りが、使われなくなった運河のように馴染みのない不吉なものが沈殿していると感じられ、猫が鉄柵を縫って歩くのを見た時、夫人は亡霊が存在する世界への道を歩いていたのかもしれない。

ハムレットは第3幕1場の有名な独白の中で眠りと夢について語る。「死ぬとは眠ること。

死んで眠る、ただそれだけのことなら、これほど幸せな終わりはない。しかし、眠ればたぶん夢をみる、それが厄介なのだ」(… To die, to sleep— / No more; and by a sleep to say we end / The heartache and the thousand natural shock / . . . / To sleep, perchance to dream. Ay, there's the rub; / For in that sleep of death what dreams may come, / When we have shuffled off this mortal coil, / Must give us pause. There's the respect / That makes calamity of so long life.)(*The Oxford Shakespeare, Hamlet*, 240)。死後に夢を見る可能性とそこでみる夢の中身についての危惧が述べられる。

「幽鬼の恋人」では、家のたわんだドアを押し開けることができたドローヴァー夫人は、絶対とは言えないが、肉体を持つ生きた存在であったと考えてもいいだろう。この後「疾走するタクシーの運転手に認めた恋人の面差しはギルト・コンプレックスが描き出した夫人の幻想だった」(山根木加名子、143)として、夫人は精神を病んでいて幻影を見ていたのだという解釈がある。ボウエンは短編集『幽鬼の恋人』のあとがきで、12編からなる本短編集は、作品が進むにつれて幻想の傾向が増していることに気づいたと述べている。

Through the stories . . . I find a rising tide of hallucination. . . .

The hallucinations in the stories are not a peril; nor are the stories studies of mental peril. The hallucinations are an unconscious, instinctive, saving resort on the part of the characters: life, mechanized by the controls of war-time, and emotionally torn and impoverished by changes, had to complete itself in some way. It is a fact that in Britain, and especially in London, in war-time many people had strange deep intense dreams. (“Postscript by the Author,” *The Demon Lover and Other Stories*, 218-219)

幻想は危険なものではない。無意識の本能的な救いのよりどころである。「幻想はたとえ恐怖に満ちたものであれ、その確かな手応えにより自己の救済手段となる」(山根木、144)という解釈がある。オーストリアの画家エゴン・シーレ (1890-1918) は『死と乙女』(*Death and the Maiden*)(1915年; ウィーン、オーストリア・ギャラリー)において、「死」は恐ろしい苦痛ではなく「永遠の安息」として描いている。

しかしながら、ハムレットが危惧したように、死の眠りの中でも夢を見るとすれば、そこで恐ろしい夢を見る可能性がある。ドローヴァー夫人は疎開して生き延びているかもしれないが、「イギリスの戦い」では1940年7月10日から10月31日にかけてイングランド南東部及びロンドンで激しい爆撃が行われており、もしかすると、夫人は疎開したけれども亡くなっていて、彼女の思念だけがこの世に残って罪悪感から生まれた夢を見ていると考えることもできる。この場合、彼女の霊魂はドアを開けたり物を持ったりすることができる。いずれにせよ、死者の夢もしくは生者の幻想の中で恐怖を味わう可能性に変わりはない。

最近の空襲で建物には亀裂が入っていた。ドロヴァー夫人は、死んだような空気に迎えられて家の中に入り、ホールのテーブルに、そこにあるはずのない彼女宛の手紙を見つける。

She thought first—then the caretaker *must* be back. All the same, who, seeing the house shuttered, would have dropped a letter in at the box? It was not a circular, it was not a bill. And the post office redirected, to the address in the country, everything for her that came through the post. The caretaker (even if he were back) did not know she was due in London today—her call here had been planned to be a surprise—so his negligence in the manner of this letter, leaving it to wait in the dusk and the dust, annoyed her. (DL, 92)

“She thought first” に続いて、ドロヴァー夫人の視点となり、理解できない事実に戸惑う夫人の意識が描出話法により示される。段落の最後は、“annoyed her” と、全知の語り手の視点に戻る。この後も、語り手の視点とドロヴァー夫人の視点の両方が交じり合って物語は進んでゆく。

手紙には、「今日は僕たちが決めた日だ。約束の時刻に、僕を待っていてくれ。」と書かれていた。

Dear Kathleen: You will not have forgotten that today is our anniversary, and the day we said. The years have gone by at once slowly and fast. In view of the fact that nothing has changed, I shall rely upon you to keep your promise. I was sorry to see you leave London, but was satisfied that you would be back in time. You may expect me, therefore, at the hour arranged. Until then . . . K. (DL, 93)

戦死したと思っていた元婚約者からの手紙という超自然的な出来事に、夫人はひどく不安になり、ドアに鍵をかけて、この場所を離れる方策を考える。

She rose from the chair and went over and locked the door.

The thing was, to get out. To fly? No, not that: She had to catch her train. As a woman whose utter dependability was the keystone of her family life she was not willing to return to the country, to her husband, her little boys, and her sister, without the objects she had come up to fetch. . . . These, with her shopping parcels, would be too much to carry; these meant a taxi—at the thought of the taxi her heart went up and her normal breathing resumed. I will ring up the taxi now; the taxi cannot come too soon: I shall hear the taxi out there running its engine, till I walk

calmly down to it through the hall. I'll ring up—But no: the telephone is cut off . . .  
She tugged at a knot she had tied wrong. (DL, 97)

「重要なのは、ここを出ることだわ。急いで？それは、だめ。乗る列車が決まっているのだから。」と、描出話法により、夫人の考えが夫人の視点で語られ始めるこの段落も、全知の語り手の視点で終わる。“She tugged at a knot she had tied wrong.”時刻は夕刻、大魔時、通りに出た夫人は、待っていたかのような1台のタクシーにひとり乗り込む。

物語の最後の段落は、全知の語り手の視点のみで語られる。

The driver braked to what was almost a stop, turned round, and slid the glass panel back: The jolt of this flung Mrs. Drover forward till her face was almost into the glass. Through the aperture driver and passenger, not six inches between them, remained for an eternity eye to eye. Mrs. Drover's mouth hung open for some seconds before she could issue her first scream. After that she continued to scream freely and to beat with her gloved hands on the glass all round as the taxi, accelerating without mercy, made off with her into the hinterland of deserted streets. (DL, 99)

語り手の視点で描かれるドロヴァー夫人は、振り向いたタクシードライバーの顔を見て最初の悲鳴をあげる。ドライバーは悲鳴をあげ続ける夫人を乗せたまま、人通りの絶えた通りのその奥へとスピードをあげて走り去る。

戦争という歪められた時代と空襲で破壊されたロンドンのたそがれ時が、“the demon”が蘇る時間と場所であった。第二次大戦期という戦争の時代、空襲で荒廃したロンドンに蘇った“the demon lover”が作り出した特別な空間に、元婚約者が引き込まれ、不気味で恐ろしい体験をするという怪奇短編小説として読むことができる。次では、男性中心社会の視点により、不条理にも恐怖に駆り立てられていく女性の物語として考察する。

### 1-3. 男性中心社会の視点

「幽鬼の恋人」についてニール・コーコランが指摘するように、古いスコットランドの伝承バラッドがインターテキストとして利用されていると考えるならば、<sup>(2)</sup> この作品は、超自然的・非現実的な出来事による恐怖が描かれていると読者に期待させる怪奇短編小説として読むことができる。バラッド「悪魔の恋人」は、長い間行方不明だった元恋人（たいていは悪魔）が、彼を待ちきれず別の男性と結婚した女性のもとに現れ、夫と子どもを捨てて自分と一緒にいこうと彼女を誘惑し、船に乗せて地獄へ連れ去るというストーリーである。<sup>(3)</sup> 「幽鬼の恋人」にも、バラッドの女性と似たような結婚をしたドロヴァー夫人と、彼女の記憶

の中に、彼女を残して戦場に戻り行方不明になった婚約者が登場する。読者には、彼が本当に戦死したのかどうか確証を得ることはできない。しかし、タイトルを手がかりにタクシードライバーの正体の謎を読み解こうとするならば、第一次大戦中に婚約者への思いを残したまま恐らくは戦死したであろう兵士が、第二次大戦という再度の戦争の時代に亡霊として蘇り、別の男性と結婚した元婚約者の前に現れるストーリーとして読むことが可能である。

物語の舞台は戦時中、8月末のロンドンで (DL, 91)、主人公は44歳である (DL, 93)。ただし、ミステリアスな物語の始まりは25年前に遡る。第一次大戦中の1916年8月、キャスリン (Kathleen) に自分を待っているようにと約束させて、婚約者はフランス戦線に戻っていった。数ヵ月後、彼が行方不明、恐らくは戦死したであろうという知らせが彼女のもとに届く。32歳になってウィリアム・ドローヴァーに求婚され、結婚し、ドローヴァー夫人としてケンジントンで暮らし、3人の男の子が生まれた。再び戦争になり、ロンドン空襲が始まると一家は田舎に疎開した。1916年8月のフランス戦線に戻る婚約者との別れから25年が経っていたことから (DL, 94-95)、物語の時代設定は1941年8月であり、ロンドン大空襲が一段落した頃と一致している。

8月の末、疎開先からロンドンの自宅に物を取りに寄った折に、元婚約者からと思われる奇妙な手紙を玄関ホールのテーブルの上に見つける。タイトルからバラッドのストーリーを重ねれば、手紙を読んだドローヴァー夫人が恐怖に怯え始めるのも不思議ではない。バラッドでは船で迎えに来ていたが、20世紀のロンドンに彼女を迎えに来た恋人は、タクシードライバーとして登場し、彼女を乗せたタクシーは、恐怖で悲鳴をあげ続ける彼女を人通りの絶えた通りのその奥へと連れ去る。戦争というこの世の関節が外れた時代とたそがれ時と空襲で破壊された建物が残る街 (ロンドン) が、幽鬼が蘇る時間と場所であった。

婚約者を待っているという約束を破って別の男性と結婚したことで、ドローヴァー夫人が元婚約者に対して罪悪感を持っていることが、意識を亡霊に支配されるひとつの要因になったと考えられる。ただ、キャスリン・ドローヴァーの場合、元婚約者に対して、全面的に彼女に非があるとは思えない。婚約者は待っているようにと行って戦地に出ていったのであるが、その彼が行方不明になり戦死したらしいと知らされた後、10年以上たってから結婚したキャスリンを、元婚約者に責める資格があるのだろうか。待つという約束を破ったからという理由で、悪魔にとり憑かれるほどキャスリン・ドローヴァーは罪深いのだろうか。心を現世に残して亡くなった、つまり、過去に囚われて、来世に行くことができず、亡霊となった兵士が、すでに彼女自身の人生を歩いているかつての婚約者を、自分と一緒にいた過去へと引きずりこもうとする、という理不尽な状況に思われる。

全知の語り手の視点は、男性中心社会が女性に要求する恋人・婚約者への貞節や忠誠にそむいたために、罰せられる恐怖に怯える女性の姿を描いているように思われる。一方、ドローヴァー夫人の視点で語られる彼女の意識は、一方的な男性や社会の要求からなんとか逃れようとする女性の気持ちを代弁していると言える。一度結婚の約束をしたのだから、たとえ

自分は死んでもフィアンセはずっと自分のものだ、と考えるような男性中心的な考え方に合わせようとして、葛藤に苦しむ女性のようにも思われる。一方で、現在の結婚生活への不満から家を出たいという願望が意識の底に潜んでいて葛藤があったというのであれば、罪悪観の一因になるであろう。戦争の時代を背景に、男性中心社会の視点とそれに異議を唱える女性の視点という互いに相反する視点が導入された作品といえる。

## 2. 「幸せな秋の野原」

「幸せな秋の野原」(“The Happy Autumn Fields”)は1944年11月にコーンヒル誌(*The Cornhill*)に発表された(“Bibliographical Note,” *The Collected Stories of Elizabeth Bowen*, 784)。タイトル“The Happy Autumn Fields”は、アルフレッド・テニスン(Alfred Tennyson, 1809-92)の詩“Tears, Idle Tears”の一節からとられている。過去に囚われることは「生における死」(“Death in Life”)<sup>6)</sup>を意味するとされる。「幸せな秋の野原」の物語は、ヴィクトリア朝と思われる時代に、刈り入れが終わり切り株だけになった秋の野原を地主の父親(Papa)と子どもたちの一団が歩いている風景描写で始まる。

They walked inside a continuous stuffy sound, but left silence behind them.  
Behind them, rooks that had risen and circled, sun striking blue from their  
blue-black wings, planed one by one to the earth and settled to peck again.

(“The Happy Autumn Fields,” *The Demon Lover and Other Stories*, 107; “The Happy Autumn Fields”の本短編集からの引用は、以降、HAFと略して頁数を数字で示す。)

一団が近づいたことで飛び立ち、空に輪を描いていた黒いみやまがらす(rooks)の群れが、一団が通り過ぎると1羽また1羽と地面に舞い降りてくる様子は、また戻ってくるという繰り返しのイメージがあり、また不吉な未来を予感させる。

秋の野原を一団になって歩く家族から離れて、サラ(Sarah)とヘンリエッタ(Henrietta)姉妹は二人きりで歩いている。二人の結びつきの強さがこの後も繰り返し描かれる。彼女たちが歩いているところに兄とその友人ユージーン(Eugene)が馬に乗って現れ、馬から下りたユージーンはサラの隣を歩き、馬の反対側をヘンリエッタが一人歩く。ユージーンはサラを、サラはユージーンを意識し始める場面である。

ここでヘンリエッタが歌い始めると、一人ぼっちにされた彼女の心の痛みがサラの心を貫く。次の“We”で始まり“Oh the word is lost!”で終わる段落では、現在形の文が続く。秋の野原の一場面を描くこの段落は、サラとメアリー(Mary)が見ている、もしくはサラがメアリーに「憑依」して見せている風景と考えられる。この段落の後、1行空いて、「ヘンリエッタ…」という呼びかけの後、次の新しい段落が始まり、1940年代に生きるメアリーの意識へと、時代も場所も異なる場面に急転換する。



At the other side of the horse, Henrietta began to sing. At once her pain, like a scientific ray, passed through the horse and Eugene to penetrate Sarah's heart.

We surmount the skyline: the family come into our view, we into theirs. They are halted, waiting, on the decline to the quarry. . . . Stop oh stop Henrietta's heartbreaking singing! Embrace her close again! Speak the only possible word—oh, say what? Oh, the word is lost!

'Henrietta . . .'

A shock of striking pain in the knuckles of the out-flung hand—Sarah's? The eyes, opening, saw that the hand had struck, not been struck: there was a corner of a table. (HAF, 114) (下線は筆者による。)

手をテーブルにぶつけた痛みで目覚めかけ、“—Sarah's?” と言うところは、メアリーの視点である。「ヘンリエッタ」という呼びかけを、この後登場する恋人のトラヴィス (Travis) が聞いていることから、1行空いた後の段落以降、4頁余り後に再び1行空いて段落が始まるまでは、空襲警報が頻繁に出ていたロンドンの場面であることがわかる。

メアリーは、空襲で被害を受け、漆喰が落ちたこのテラス・ハウスで、値打ちのあるものや必要なものを探していたが、いつのまにか眠っていたらしい。トラヴィスはベッドのそばの床の上に蓋が開いている古い皮の箱を見つける。中には黄色く変色した写真があった。

For answer Travis turned to look down, expressively, at some object out of her sight, on the floor close by the bed. 'I see,' he said, 'a musty old leather box gaping open with God knows what—junk, illegible letters, diaries, yellow photographs, chiefly plaster and dust. Of all things, Mary!—after a missing will?' (HAF, 117)

写真は、あご髭、猟銃を持ちシルクハット、口髭のある学生、お屋敷の前に止めてある二頭立て四輪馬車、階段に並んだ人々が写っているもののほかに、野原の絵の前で二人の若い女性が手をつないで写っている手札型写真もあった。“... a *carte de visite* of two young ladies hand-in-hand in front of a painted field.” (HAF, 118) メアリーは後2時間ひとりにしておいてくれと頼み、トラヴィスは先ほどの箱を持って部屋を出て行く。

場面は戦時中のロンドンから、再び過去の夕刻、一家とユージーンがいる屋敷の団欒の場面が変わる。母親 (Mamma) が、翌日男の子たちが学校に戻るため家を離れるのを寂しく思いながら、ユージーンに目を向けて「明日は悲しい一日になるわ」と言う。“She sighed and lifted her eyes to Eugene. ‘Tomorrow is to be a sad day.’” (HAF, 122) この日、帰宅途中、

日の暮れた野原で落馬して亡くなる青年に向けられた台詞であることから、一種の劇的アイロニー、伏線と考えられる。

ヘンリエッタはサラとユージーンが親しくなることが喜ばず、三人の間の会話は緊張をはらんでいた。ヘンリエッタはサラに「あなたは野原を馬で駆けてきた人たちのことを決して忘れないでしょう。」“Before Eugene had composed an answer, she turned to Sarah: ‘Oh you, them riding across the fields?’”(HAF, 123)と、つまり、サラはユージーンを決して忘れないだろうと言う。これは、恐らくは恋心を抱いたばかりの相手の青年の死後、サラの心が青年についての記憶に囚われたままになる伏線と考えられる。

この後も、姉妹とユージーンの間で、凶らずも不吉な未来を暗示するような会話が交わされる。サラがヘンリエッタに向かって「私をあなたの見えないところに行かせないでしょう？」“‘You will never let me out of your sight?’”と言うと、ユージーンはヘンリエッタに向かって、「ええ、彼女の願いをかなえると、彼女に約束してください。」と言う。“Eugene, addressing himself to Henrietta, said: ‘Yes, promise her what she asks.’”ヘンリエッタは「サラは絶対に私の見えないところに行ったりしない。・・・私とサラの間に何が割って入ろうとしても無駄です。・・・サラと二人きりになれる人はいません。」と答える。“‘She is never out of my sight. . . . Whatever tries to come between me and Sarah becomes nothing. Yes, come tomorrow, come sooner, come—when you like, but no one will ever be quite alone with Sarah.’”(HAF, 126) これは、将来、サラがユージーンと結婚することはないことを予言する言葉となる。

物語は、この後、ロンドンの家が空襲を受け、メアリーの意識はそのショックで、サラに引き込まれていた過去から 1940 年代初めのロンドンに戻る。空襲直後に、トラヴィスはタクシーで家に到着すると、メアリーをこの屋敷から連れ出してくれる。トラヴィスは彼女をタクシーに乗せると、箱の中にあった手紙などからわかった内容を語る。

‘. . . From all negative evidence Sarah, like Henrietta, remained unmarried. I found no mention of either, after a certain date, in the letters of Constance, Robert or Emily, which makes it seem likely both died young. Fitzgeorge refers, in a letter to Robert written in his old age, to some friend of their youth who was thrown from his horse and killed, riding back after a visit to their home. The young man, whose name doesn’t appear, was alone; and the evening, which was in autumn, was fine though late. Fitzgeorge wonders, and says he will always wonder, what made the horse shy in those empty fields.’ (HAF, 129)

サラとヘンリエッタは、未婚のまま若くして亡くなっただけらしい。そして、青年(ユージーン)があの日“the evening”に、屋敷に帰る途中の野原で落馬して亡くなった。

サラは、ユージーンの突然の死のショックに、未来に向かって生きることをやめ、生きているユージーンとの最後の思い出に囚われ、一度飛び立ったみやまがらすがまた地面に舞い戻ってくるように、秋の野原と団欒の場を繰り返し思い出していたのではないだろうか。死後も、彼女の霊魂はこの世に思いを残し、一家の写真が入った箱がメアリーによって開けられるまで、写真とともにあったのではないだろうか。箱を開けたメアリーは、死者の思い出の世界へと引き込まれて夢を見ていたのだが、空襲の物理的なショックが彼女を現実世界へと引き戻したと考えられる。割れた窓から、果てしなく暮れてゆく夏の午後の何一つ通さないほどの曇り空が見えた。“Through the torn window appeared the timelessness of an impermeably clouded late summer afternoon.”(HAF, 126-127) あの野原に戻る道の一つは、メアリーが空襲による天井の落下を生き延びたことにより絶たれた。現実世界の空襲という暴力的力が彼女を夢から覚まさせ、死者の思い出の世界を閉じたことにより、メアリーの意識はサラの意識から離れてしまった。彼女が誰であったかも大切な人の名前も彼女の記憶からやがて消えていくのである。“Eugene, Henrietta were lost in time to the woman weeping there on the bed, no longer reckoning who she was.”(HAF, 127)

#### まとめ

「幽鬼の恋人」では、全知の語り手と女性主人公の対立する意識を通して物語が進行する。語り手の視点は、男性中心社会が女性に要求する恋人・婚約者への貞節や忠誠にそむいたために、罰せられる恐怖に怯える女性の姿を描く。一方、ドローヴァー夫人の視点は、一方的な社会や男性の要求からなんとか逃れようとする女性の気持ちを代弁しているように思われる。「幸せな秋の野原」は、全知の語り手の視点に時代の異なるサラとメアリーの二人の視点が加わったミステリアスな短編である。はるか昔に亡くなったけれども、サラは大切な妹ヘンリエッタと初めて淡い恋心を抱いた青年ユージーンと過ごした最後の思い出の時間に囚われ、過去に執着するあまり、死後も霊魂はこの世にとどまり、箱に入れられた一家の写真とともにあったのだろう。第二次大戦中の夏の午後、空襲を受けたロンドンの屋敷でメアリーがサラの一家の遺品が入った箱を開けたとき、彼女の霊魂がメアリーに乗り移り、サラが執着する過去をメアリーの夢として見せていたと考えられる。サラが見せる過去の幻想と切り離されることによって、メアリーはトラヴィスとともに未来に向かって進むことができる。「幽鬼の恋人」の戦死した兵士は、婚約者への強い執着心から、第二次大戦という戦争の時代が再訪したとき、夕刻（大魔時）に、婚約者がロンドンで住んでいた家を手がかりに亡霊となって彼女の前に現れる。「幽鬼の恋人」も「幸せな秋の野原」も、空襲の被害のあったロンドンを舞台に、主人公が訪れた屋敷で亡霊が人物の意識に影響を及ぼし、幻想を見せる様子を描いている。二つの短編において、戦争の時代とは、人に、死に結びついた幻想や夢を見せ、苦悩や悲しみを味あわせる時代であった。ただ、「幽鬼の恋人」のドローヴァー夫人は超自然的な力にとらわれたままあちらの世界に連れ去られてしまうが、「幸せな

秋の野原」のメアリーは呪縛から解放されてこちらの世界に戻ってくる。戦争から生まれた幻想が常に破滅と結びつく訳ではない。

注

- (1) A. J. P. Taylor, *English History 1914-1945*. (Oxford: Oxford University Press, 1990) 498-507. 村瀬興雄編『世界の歴史 15 ファシズムと第二次大戦』（中公文庫）486-488.
- (2) Neil Corcoran, *Elizabeth Bowen: The Enforced Return*. (Oxford: Oxford University Press, 2004) 149-150. “One is the literary return which is allusion or intertext. ‘The Demon Lover’ takes its title from an old Scottish ballad (sometimes known as ‘The Carpenter’s Wife’) and, with eerily chilling brilliance, the story makes contemporary the ballad’s tale of someone returned from the dead to redeem a promise from a one-time lover . . . .”
- (3) “The Daemon Lover” . . . is a popular English ballad. It tells the story of a man (usually the Devil), who returns to a former lover after a very long absence, and finds her with a husband (usually a carpenter) and a baby. He entices her to leave both behind and come with him, luring her with many ships laden with treasure. Together they board one of his ships (which in many versions she is surprised to find does not have a crew) and put to sea. . . . She soon begins to lament leaving behind her child, but is heartened by spying a bright hill in the distance. Her lover informs her that the hill is heaven, where they are not bound. Instead he indicates a much darker coast, which he tells her is hell, their destination. He then breaks the ship in half with his bare hands and feet, drowning them both. In other versions, the ship is wrecked by a storm at sea.

<[http://en.wikipedia.org/wiki/The\\_Daemon\\_Lover](http://en.wikipedia.org/wiki/The_Daemon_Lover)>

- (4) 野島秀勝訳、シェークスピア作『ハムレット』（岩波文庫）岩波書店。 11.
- (5) Alfred, Lord Tennyson. The Princess: Tears, Idle Tears  
第1連 Tears, idle tears, I know not what they mean,  
Tears from the depth of some divine despair  
Rise in the heart, and gather to the eyes,  
In looking on the happy Autumn-fields,  
And thinking of the days that are no more.  
第4連 Dear as remember'd kisses after death,  
And sweet as those by hopeless fancy feign'd  
On lips that are for others; deep as love,

Deep as first love, and wild with all regret;

O Death in Life, the days that are no more! (下線は筆者による。)

<<http://www.poetryfoundation.org/poem/174651>>

#### Works Cited

Bowen, Elizabeth. *The Collected Stories of Elizabeth Bowen*. 1980. London: Jonathan Cape, 1982.

----. "The Demon Lover." *The Demon Lover and Other Stories*. 91-99.

----. *The Demon Lover and Other Stories*. 1945. London: Jonathan Cape, 1970.

----. "The Happy Autumn Fields." *The Demon Lover and Other Stories*. 107-129.

----. "Postscript by the Author." *The Demon Lover and Other Stories*. 216-224.

Corcoran, Neil. *Elizabeth Bowen: The Enforced Return*. Oxford: Oxford UP, 2004.

"The Daemon Lover." <[http://en.wikipedia.org/wiki/The\\_Daemon\\_Lover](http://en.wikipedia.org/wiki/The_Daemon_Lover)>

Doody, Noreen. "Elizabeth Bowen: A Short Biography." *Elizabeth Bowen*. Ed. Eibhear Walshe. 1-11.

Glendinning, Victoria. *Elizabeth Bowen*. 1977. New York: Anchor Books. 2006.

Shakespeare, William. *The Alexander Shakespeare, Hamlet*. Ed. B. Davie. London: Collins, 1973.

----. *The Oxford Shakespeare, Hamlet*. Ed. G. R. Hibbard. Oxford: Oxford UP, 2008.

Taylor, A. J. P. *English History 1914-1945*. 1965. Oxford: Oxford UP, 1990.

Tennyson, Alfred. "The Princess: Tears, Idle Tears."

<<http://www.poetryfoundation.org/poem/174651>>

Walshe, Eibhear, ed. *Elizabeth Bowen*. Dublin: Irish Academic Press, 2009.

木畑洋一 「第9章 第二次世界大戦」『世界歴史体系 イギリス史3—近現代—』319-344.

野島秀勝訳、シェークスピア作『ハムレット』(岩波文庫) 岩波書店. 2012.

村岡健次、木畑洋一編『世界歴史体系 イギリス史3—近現代—』山川出版社. 1999.

村瀬興雄編『世界の歴史15 ファシズムと第二次大戦』(中公文庫) 中央公論社. 1975.

山根木加名子『エリザベス・ボウエン研究』旺史社. 1991.